



## 「自閉症児への架橋（どう理解し どう導くか）」

安藤 春彦・山崎 晃資・白橋 宏一郎・猪股 丈二 著

自閉症児の理解と指導の架橋と題された本書は、数の上では圧倒的に少数ではあっても、その原因究明がなされず、したがって養育、治療、教育の面でも厚い壁にふさがれているゆえに社会的にも注目されている自閉症児を理解するために、現場や親などの関係者が焦りや苦悩に満ちているという状況を認識し、これまで関係者が求めていたのは実際的な困難に対する具体的対処法であって、必ずしも専門的で、アカデミックなものではないとする医師の立場から書かれたものである。したがって、本文 321 ページ、33 章に渡り、現場や親の切実な質問に、具体的に応えるという形をとって、自閉症の診断、病因、予後、「自閉症らしいと疑われたらどうしたらよいか」、「奇妙なくせや異常行動にどう対処したらよいか」、親の会、通園施設での療育、行動療法、入院治療、短期入院、遊戯療法、言語訓練、体育指導、統合教育と保育、就学、授産所、児童相談所、年長化と親の老齢化など自閉症を取り巻くほとんどの問題に平易に「応えて」いる。また、巻末には執筆者たちの座談会が載っており、現在、この領域では第 1 人者を自認する各氏の生の声……自らの自閉症児との出会いから最近増えている自

閉症関係の出版物に対する考え、病因に関する率直な意見に至る……が読める。また、親の会全国協議会や各地区の住所が載っており、親の連帯を促している。こうしたことは、本書の目的とすることをほぼ達成していると思われる点である。

しかし、この特色はそのまま本書の総花的な欠点にもなる。確かに、各章にあげられているような事に困っている親や職員はいるだろうが、これがそのまま解決を示しているものとは必ずしも、言えない。例えば、言語訓練について書かれた章で紹介されている例は、結局「比較的知能の高い自閉症児」であり、職員や親が本当に困って、悩んでいる子どもの像からはほど遠いものであろう。

ともあれ、入門書、または、総説として、一読の価値があるものである。

(A 5 頁366 図11 写真8 表32 ￥3,200 円350 医学書院 1983)

(北海道大学医療技術短期大学部 作業療法士

山田 孝)